

「屈原と楚辞」第四回

「離騷の後半」テキスト

2025-6-26

香取（神漢 A014）

離騷

（終りなき憂愁のうた） 屈原

訳は、ネット上の黒須重彦訳を一部修正。

「離騷」の後半（第十段以降）

人間社会に絶望した主人公が、天上世界へと飛躍し、天界の遊行の中で、理想を追い求める様子を詠う。

心に深い悲しみを抱えながら、さまよい続けた主人公は、さすらいの果てに九疑山きゅうぎさんの舜帝の霊前にたどり着く（第九段）。

舜帝の前にひざまずき、思いのたけを述べつくした主人公に、突然ひとつの啓示が降りてくる。主人公はその啓示に従って、遠く神々の世界へと旅立つ。

目次

1. 離騷の後半（第十段～十六段）

第十段… 天界へ遊行。天帝の門は開かれず、人のねたみを悲しむ。この段の幻想的な叙述は、雄大華麗、実に「離騷」篇の圧巻である。

第十一段… 美女を求める旅を続けるが、得られない。佞人は善を蔽い悪をほめる、また君主が実情を知らないと嘆く。

第十二段… 巫霊氛みとれいふんに占わせて、今後の行動を決しようとする。

第十三段… 巫咸ふかかんは同じ志操の君主を求めて、今のまだ老年にならぬうちに出発するように勧める。

第十四段… せめて自分の佩おび物のように香り高く志操を守り、まだわが容色の美しい間に、あまねく天地を上下して、美人を求めて一緒にになりたい（理想の君主を得て仕えたい）。

第十五段… いよいよ自分のあこがれの乙女、知己ちぎをもとめて、遠征の途に上がる。途中ではるか下界の楚国に故郷が真下にちらりと見えると、強い思郷の念に駆られ、足も立ちすくみ進むことが出来なくなった。この段は「離騷」篇のクライマックスといふべきもの。

第十六段… 結語

2. 離騷の後世詩文への影響

① 李白 古風其一

② 楚辞 日本への影響

第十段

◆ 天界へ遊行。

◆ 靈均は重華に辞を陳べおわると、広大な宇宙の旅に出かける。伝説の神秘的な天のはてに、天体や風雲の神々と共に歴遊するが、天帝の門は開かれず、日は暮れようとするのに、求める佳人にはめぐり遇えず、世は混濁して、人のねたみを悲しむ。この段の幻想的な叙述は、雄大華麗、実に「離騷」篇の圧巻である。

けれどもはるかなる舜帝の靈廟に裾を敷いて跪いて、わが思いを述べ終ると、神の声はあきらかに、心に明るく正しい道を得た心地がして、四頭の虬に曳かせた鷺の鳥に乗り、たちまち風を迎えて空に昇った。

朝、舜帝の靈廟の地、蒼梧を出立って、夕には天帝の住む聖なる崑崙山の崑崙山に着いた。しばらくこの美しい天門に休もうとすれば、日は見る見るうちに暮れかかる。

太陽の御者義和に歩みをゆるませ、日の沈む西の山、崦嵫山に近づかせず、はるばると遠い路をのぼりくだって聖なる国によきひとを捜し求める。

わが馬に日の神の浴する咸池で水飲ませ、わが手綱を神木扶桑に結び、夜光という若木を折って日を払い、しばらくあたりを逍遙しよう。

望舒（月の御者）を先駆に立て、飛廉（風の神）をあとにしたがえ、鸞皇（鳳凰の類）は私のために道を払うが、雷神はさらに雲と虹とを供ぞろえに加えることをいう。

そこで鳳凰を高く飛ばせ、夜を日について急がせ、雲と虹を迎えにやると、飄風（つむじ風）はどっと集まりまた散って、雲と虹をつれてやって来て、天帝のもとへと案内する。

わが行列に雲がむらがりまた散って、乱れきらめき上下して進んで行った。さて天門の番人に門を開けといえ、彼は門に寄り掛ってそしらぬ顔で見ているばかり。

日はうす暗く暮れかかるに、私の心を伝えるすべなく幽蘭を結んでむなしく佇む。世は乱れ濁ってよしあしも分たず、ここでもまた好んで人の美を蔽いねたむのか。

注）● 虬：龍の子で角のあるもの。 ● 鷺：鳳凰の一種。 ● 蒼梧：山名。九疑山と同じ。 ● 崑崙山：中国の西方にある山名 ● 崑崙山：崑崙山上の神の園。 ● 崦嵫山：甘肅省天水県西にある山名。 ● 幽蘭：人里離れた奥深い所で咲く蘭、最も香がよいという。

跪敷衽以陳辭兮，耿吾既得此中正。

跪き衽を敷きて以て辞を陳べ、耿らかに吾既に此の中正を得たり。

馳玉虬以桀鷺兮，溘埃風余上征。

玉虬を駟として以て鷺に乗り、溘ち風に埃あげて余上り征く。

朝發軔於蒼梧兮，夕余至乎縣圃。

朝に軔を蒼梧に発し、夕に余県圃に至る。

欲少留此靈瑣兮，日忽忽其將暮。

少く此の靈瑣に留まらんと欲すれば、日は忽忽として其れ將に暮れんとす。

吾令羲和弭節兮，望崦嵫而勿迫。

吾羲和をして節を弭めて、崦嵫を望んで迫ること勿からしむ。

路曼曼其修遠兮，吾將上下而求索。

路は曼曼として其れ脩遠なり、吾將に上下して求索せんとす。

飲余馬於咸池兮，總余轡乎扶桑。

余が馬を咸池に飲め、余が轡を扶桑に結ぶ。

折若木以拂日兮，聊逍遙以相羊。

若木を折りて以て日を払い、聊か逍遙して以て相羊す。

前望舒使先驅兮，後飛廉使奔屬。

望舒を前にして先驅せしめ、飛廉を後にして奔属せしむ。

鸞皇爲余先戒兮，雷師告余以未具。

鸞皇 余が為に先ず戒め、雷師余に告ぐるに未だ具わらざるを以てす。

吾令鳳鳥飛騰兮，繼之以日夜。

吾 鳳凰をして飛騰せしめ、之に繼ぐに日夜を以てす。

飄風屯其相離兮，帥雲霓而來御。

飄風屯まりて其れ相離れ、雲霓を師いて来り御う。

紛總總其離合兮，斑陸離其上下。

紛として總總として其れ離合し、斑として陸離として其れ上下す。

吾令帝閭開關兮，倚閭闔而望予。

吾 帝閭をして関を開かしめんとすれば、閭闔に倚りて予を望む。

時曖曖其將罷兮，結幽蘭而延佇。

時は曖曖として其れ將に罷まらんとし、幽蘭を結んで延佇す。

世溷濁而不分兮，好蔽美而嫉妒。

世 溷濁して分かたず、好んで美を蔽いて嫉妬す。

(注)

●衽…上衣の前。 ●軔…車輪を止める木。 ●靈瑣…神靈の国に入る門。

●相羊…行きつ戻りつして進まないさま。 ●紛…入り乱れるさま。

●總總…集まるさま。 ●斑…分散する。 ●陸離…美しい形容。 きらめく

●帝閭…天帝の門番。 ●閭闔…天の門の名。 ●曖曖…うすぐらく夕暮れるさま。

第十一 段

◆ 美女を求める旅を続けるが、得られない。佞人は善を蔽い悪をほめる、また君主が実情を知らないと嘆く。

◆ 靈均は西のかた白水を渡り、閼風山を尋ねたが、高丘には求める神女はいないので、忽ち東方の春宮に遊び、下界の伝説の美女を求めようとする。まず、宓妃に申し入れるが彼女の氣に入らず、窮石に宿った彼女は夫羿と淫楽して無礼であった。それを捨てて有娥の美女に申し入れるが、高辛氏に後れて成功しない。次に有虞の二女に望みをかけるが、これも少康に得られてしまう。求める佳人は閼の奥深くに住んでいるので意を達することも出来ない。君主は実情を知らず、佞人は善を蔽い悪をほめる。これらの人たちといつまでも共にいることが出来ないと嘆くのである。

夜明けて白水を渡り、その道すがら、閼風の山に馬をつないで休もうとして、ふとふり返り見ては涙を流し、この崑崙の高丘にも美女の居らぬのを哀しむ。

今は仕方なく東方の神、神青帝の春宮に遊び、玉の枝を折って佩物に継ぎ、この花のまだ散らぬ間に、下界のよきひとを尋ねて贈ろう。

豊隆（雷神）に命じて雲に乗り、古の神女である宓妃（伏羲氏の娘）の居る所をさがさせて、佩帯を解いて言葉を結び、雷神をして蹇脩（伏羲の臣）にたのんで求婚の申し入れをさせた。

雷神は行きつ戻りつ離れつ合いつ入り乱れたが、「宓妃の心はたちまち背いて此方へは来ぬ」と。彼女は夕に窮石の夫羿のもとに宿り、朝は洧盤川の水で髪を洗うのだ。

自分のその美しさに驕りたかぶり、日々に羿と楽しみたわわっている。

まことに美しいとはいえ礼節もない。「よしこれを見棄ててほかをさがそう」と。

世界四方のはてを見渡して、天を巡って地に降れば、瑤台（玉のうてな）の高い所に**有娥氏**の美女を見つけた。

そこで鳩（鳥の名）にたのんで媒（仲人）させると、毒を持つ鳩はあしぎまに彼女をそしった。雄鳩は鳴きながら飛んで行ったが、その口ばかり達者なのを私は憎む。心ためらいうたがいつつ、さりとて自分で行くこともならず、

鳳凰が詒^{おくり}ものを授けた上は、恐らくは聖王の高辛^{こうしん}氏が先に娶^{めと}ってしまいうだろう。

遠く行こうとしてあてもなく、しばらくさまよい遊びつつ、少康^{しょうこう}がまた娶^{めと}らぬうちに、有虞^{ゆうぐ}国の桃氏の二女を引きとめよう。

だが申し入れのことばも弱く媒^{ばい}も拙^{つたな}く、求婚のあてにならぬのを私は恐れる。世の中は乱れ汚れて賢者を嫉^{ねた}み、好んで人の美を隠して悪しきをいう。

ああ深閨^{しんけい}の美女は求めることもできず、聡明な君主もめざめ給わぬ。わがおもいを胸にいだいてのべぬままに、どちらを向いても行きづまり、わが生をかくて終えることがでようか。

注) ●白水：崑崙山から出る河。 ●閭風：崑崙山の近くの山。 ●窮石：甘肅省の山の名。 ●沅盤：崦嵫山に源を発する水名。 ●瑤台：玉で飾ったうてな。台は四方展望のきく高館。李白の詩「清平調詞其一」で瑤台を詠っている(李白一〇〇選 p115)。 ●有娥氏：古代の部族。二人の娘は、帝嚳^{こく}の妃とその妹。 ●高辛：帝嚳の天子としての称号。 ●少康：夏王朝再興の君。 ●有虞：舜の子孫の部族名。姓は桃。

朝吾將濟於白水兮，登閭風而縹馬。

朝に吾將に白水を濟^{わた}り、閭風に登りて馬を縹^{つな}がんとす。

忽反顧以流涕兮，哀高丘之無女。

忽ち反顧^{はんこ}して以て流涕^{りゅうてい}し、高丘の女無きを哀しむ。

溘吾遊此春宮兮，折瓊枝以繼佩。

溘^{たちま}ち吾此の春宮に遊び、瓊枝^{けいし}を折りて以て佩^{はい}に繼^つぐ。

及榮華之未落兮，相下女之可詒。

榮華の未だ落ちざるに及び、下女の詒^{おく}る可きを相^みん。

吾令豐隆乘雲兮，求宓妃之所在。

吾豐隆をして雲に乗り、宓妃^{ふくひ}の在る所を求めしむ。

解佩纓以結言兮，吾令謇修以爲理。

佩纓^{はいじよう}を解いて以て言を結び、吾蹇脩^{けんしゆう}をして以て理を為さしむ。

紛總總其離合兮，忽緯繡其難遷。

紛として總總^{そうそう}として其れ離合し、忽ち緯繡^{きくわく}して其れ遷^{うつ}り難し。

夕歸次於窮石兮，朝濯發乎沅盤。

夕べに歸りて窮石^{きゆうせき}に次^{やど}り、朝に髪を沅盤^{いばん}に濯^{あら}う。

保厥美以驕傲兮，日康娛以淫遊。

厥の美を保ちて以て驕傲し、日々に康娛して以て淫遊す。
雖信美而無禮兮，來違棄而改求。

信に美なりと雖も礼無し、来れ違棄して改め求めん。

覽相觀於四極兮，周流乎天余乃下。

覽て四極を相觀し、天に周流して余及ち下る。

望瑤臺之偃蹇兮，見有娥之佚女。

瑤台の偃蹇たるを望み、有娥の佚女を見る。

吾令鳩爲媒兮，鳩告余以不好。

吾鳩をして媒を為さしむるに、鳩余に告ぐるに好からざるを以てす。

雄鳩之鳴逝兮，余猶惡其佻巧。

雄鳩の鳴き逝く、余猶お其の佻巧を惡む。

心猶豫而狐疑兮，欲自適而不可。

心猶豫して狐疑し、自ら適かんと欲するも可ならず。

鳳凰既受詒兮，恐高辛之先我。

鳳凰は既に詒を受く、恐らくは高辛の我に先んぜんことを。

欲遠集而無所止兮，聊浮游以逍遙。

遠く集らんと欲するも止まる所無し、聊か浮游して以て逍遙せん。

及少康之末家兮，留有虞之二姚。

少康の未だ家せざるに及び、有虞の二姚を留めん。

理弱而媒拙兮，恐導言之不固。

理弱くして媒拙く、導言の固からざるを恐る。

世溷濁而嫉賢兮，好蔽美而稱惡。

世溷濁して賢を嫉み、好んで美を蔽いて惡を稱ぐ。

閨中既以邃遠兮，哲王又不寤。

閨中既に以て邃遠なり、哲王又寤らず。

懷朕情而不發兮，余焉能忍而與此終古？

朕が情を懷きて発せず、余焉くぞ能く忍びて此と終古せん。

注)

●緯繡…そむきたがう。●偃蹇…高くうねり続く建物の形容。●佚女…すぐれた美女。
●邃遠…奥深く遠い。●哲王…智の明らかな君主。これまですべてあこがれの佳人・
神女、伝説の美女として陳べてきたが、ここに哲王の一字を出した。これが佳人・
美女の正体である。

第十二段

◆ 巫靈氣に占わせて、今後の行動を決しようとする。

◆ 靈氣は、美男美女が合うためには、遠い他国へ行くのがよいと勧める。楚国の党人輩は、靈均や靈氣らと好悪が正反対で、他人の美を認めないからであるという。

靈草のちがやと竹の小枝を手にとり、靈氣にたのんで占わせると、

「美しい者同士は必ずいつかは会うべきはず、誰が真に美しい者を慕わずにいようか
天下はかくも広いのに、よもやここにのみ美女があらうか」と。

「努めて遠くゆきたまえ、そして疑い迷ってはいけない。よきものを求める人あらば誰
とて君を棄てはせぬ。

世界のいずことして芳草のない所はない、何故にそなたは故郷をのみ思いわずらうか。
ああしかし世は暗闇にまどいくらみ、誰が我々の美質善悪を察してくれよう。

人の好悪はさまざまだが、彼ら佞人どもこそ変っている。彼らは臭い蓬をいっぱい
腰につけ、香しい蘭などは佩びられぬという。

草木の芳臭をも知りえぬ者が、どうして美しい玉を見分け得よう。

こともあらうに、腐土をとって香囊に充たし、申椒は芳しくないと言うのだ」と。

注) ● 靈氣：靈は巫の姓、氣は巫の名。

索瓊茅以筮簪兮，命靈氣爲余占之。

瓊茅と筮とを索りて簪い、靈氣に命じて余が為に之を占わしむ。

曰：「兩美其必合兮，孰信脩而慕之？」

曰く、両美は其れ必ず合わん、孰か信に脩くして之を慕わんや。

思九州之博大兮，豈惟是其有女？」

思うに九州の博大なる、豈唯だ是にのみ其れ女有らんや、と。

曰：「勉遠逝而無狐疑兮，孰求美而釋女？」

曰く、勉めて遠逝して狐疑する無かれ、孰か美を求めて女を釈てん。

何所獨無芳草兮，爾何懷乎故宇？

何の所にか独り芳草無からん、爾何ぞ故宇を懷う。

世幽昧以眩曜兮，孰云察余之善惡？

世幽昧にして以て眩曜す、孰か云に余の美惡を察せん。

民好惡其不同兮，惟此黨人其獨異！

民の好惡は其れ同じからず、惟だ此の党人のみ其れ独り異なり。

戶服艾以盈要兮，謂幽蘭其不可佩。

戸ごとに艾を服して以て要に盈て、幽蘭は其れ佩ぶ可からずと謂う。

覽察草木其猶未得兮，豈理美之能當？

草木を覽察するすら其れ猶お未だ得ず、豈理の美に之れ能く当らんや。
蘇糞壤以充幃兮，謂申椒其不芳」。

糞壤を蘇りて以て幃に充て、申椒は其れ芳しからずと謂う、と。

注

●筵…小折竹。●幽昧…道が無く、暗黒なこと。

●眩曜…光にあたって目がくらむ。●理…美玉。

●幃…香囊。

第十三段

◆巫咸ふかんが天から降ると聞いて、これを出迎えて判断を聞こうとする。巫咸は遠征して同じ志操の君主を求めよと、歴史上の例をあげて説き、靈氣の吉占に従って、今のまだ老年にならぬうちに出発するように勧める。

この靈氣の占いに従おうと思いつながら、心は猶もためらいまどい故郷を後にできない。巫咸ふかん（神巫の名）が夕に天から降るとき、椒しやうと精米をもつてこれを迎えた。

神々は空を蔽うて天降り、九嶷山きゅうぎざんの神靈は揃って出迎える。

巫咸はかがやかにその靈光をあげて、私に遠遊の吉であるよい占いを告げた

「つとめて天に上り地に下って、汝と同じ道を守る君を求めよ。

湯王・禹王はつつしんで心の合う臣を求め、湯王の伊尹いゐん・禹の咎繇こうよう（皐陶）はよくそれに同調した

もしもお前の心情が美しく善いなら、必ずしも仲介人はいらぬ。

傳説かえつは傳巖ふがんで路を築いていた奴隸だったが、殷の高宗武丁こうそうぶていは厚く信じてこれを用いた。

太公望呂尚りやうしやうは牛を屠殺を業としていたが、周の文王に挙用され、甯戚ねいせきは牛を飼って歌っていたが、齊の桓公がこれをきいて輔佐に備えた。

年をあまり取らぬうち、時期もまだ過ぎぬうちが大切だ。恐らくは鵲もずが鳴き出して、秋にはやがて草は皆枯れ香を失うだろう。

何とその佩物の見事さよ。その美質を衆人は蔽うて隠そうとする。この党人の輩の誠心のなさ。恐らくは嫉妬してこれを壊すであろう。」「と

注

●伊尹（摯）…殷の湯王の賢相。●咎繇（皐陶）…夏の禹王の賢相。

●傳説…傳巖の道路で働いていた人夫だったが、殷王武丁に持ちられて名宰相となった。●傳巖…北海にあるけわしい道。●高宗…国運を大いに興した名君。

●呂尚（呂望）…文王は狩りをして渭水のほとりで呂望の釣をしているのに会った。文王は夢に聖人を得ると見たその人であるというので、連れて帰って師とした。

●甯戚…牛に飯を食わせる時に歌ったのを、春秋の五霸の一人齊の桓公が聞いて、これを見出し用いた。

欲從靈氛之吉占兮，心猶豫而狐疑。

靈氛の吉占に従わんと欲すれども、心猶豫して狐疑す。
巫咸將夕降兮，懷椒糈而要之。

巫咸 将に夕べに降らんとす、椒糈を懷いて之を要す。

百神翳其備降兮，九疑繽其並迎。

百神 翳いて其れ備に降り、九疑 繽として其れ並び迎う。

皇剡剡其揚靈兮，告余以吉故。

皇は剡剡として其れ靈を揚げ、余に告ぐるに吉の故を以てす。

曰：「勉升降以上下兮，求矩矱之所同。

曰く、勉めて升降して以て上下し、矩矱の同じき所を求めよ。

湯禹儼而求合兮，摯咎繇而能調

湯禹は儼にして合うを求め、摯と咎繇とは而ち能く調う。

苟中情其好脩兮，又何必用夫行媒？

苟くも中情其れ脩を好まば、何ぞ必ずしも夫の行媒を用いん。

說操築於傅巖兮，武丁用而不疑。

説は築を傅巖に操れども、武丁用いて疑わず。

呂望之鼓刀兮，遭周文而得舉。

呂望の刀を鼓する、周文に遭いて挙げらるるを得たり。

甯戚之謳歌兮，齊桓聞以該輔。

寧戚の謳歌する、齊桓聞いて以て輔に該えり。

及年歲之未晏兮，時亦猶其未央。

年歳の未だ晏からず、時も亦猶お其れ未だ央ぎざるに及ばん。

恐鵜鴂之先鳴兮，使夫百草爲之不芳。

恐らくは鵜鴂の先ず鳴きて、百草をして之が為に芳しからざらしめんことをと。

何瓊佩之偃蹇兮，衆薺然而蔽之。

何ぞ瓊佩の偃蹇たる、衆薺然として之を蔽う。

惟此黨人之不諒兮，恐嫉妬而折之。」

惟だ此の党人の諒ならざる、恐らくは嫉妬して之を折かん。

(注)

●皇…天神。巫咸のこと。 ●剡剡…発光の形容。

●矩矱…法度。

●行媒…彼我の間を往来して媒をするもの。

●鵜鴂…もず。

●偃蹇…美しき貌。

●薺然…蔽いかくすさま。

第十四段

◆ 靈均は、時の流れがあわただしく過ぎ易いので、久しくここに留まることはできないと思う。まして、**蘭・椒**と思つて頼りにしていた人物も皆世俗に従つて変化してしまつたので、せめて自分の佩^おび物のように香り高く貴重な志操を守り、まだわが容色の美しい間に、あまねく天地に上下して、美人を求めて一緒になりたい。理想の君主を得て仕えたいというのである。

時世は乱れ乱れてうつり易^{かわ}る、何でまた久しくこの地に留まれようか。 **蘭も芷も** 變つてともども香を失い、 **荃も蕙も** 化してただの茅^{ぼう}となる。

なぜに昔の芳草が、今はただ雑草となりはてるのか。そのゆえはほかでもない、善を好むことが無いための害なのだ。

私はこれまで蘭のごときとたのみにしていたが、ああうわべばかりで実はなかつた。その美しいものを棄てて世俗に従い、ただかりそめに芳草に列なっているまでだった。

椒はひたすら媚びて放縦で、**掇**もまた香囊^{かおりぶくろ}に充たされようと願っている。地位を求めて取り入るからは、また芳香な美質や教養を大切に出来ようか。

もとより時俗は流れを追い、人の世も移りゆき誰とて変化せずには居れぬ。椒や蘭でさえこのとおり。まして**掲車**や**江離**などは時流にさからえぬのは当然のこと。

ただわが佩物・美質の貴さは、その美を棄てられてここに至っても、乱世にこそ芳香たかく消えることなく、ひとり際立ち輝き、今に及んでなお止まぬ。

いろいろ考えた末、態度を和らげて自分で娛しみ、しばらくさまよいめぐつて美女を求めよう。この花飾りのあせぬ間に、あまねく天上地下を巡^{めぐ}ろう。

注)

● **蘭、芷**…君子・善人のたとえ。 ● **荃、蕙**…ともに香草の名。 ● **椒**…山椒。

● **掇**…茱萸^{しゅゆ}。山椒に似て香気が少ない。 ● **掲車、江離**…椒や蘭に比べ香気が少ない。

時續紛其變易兮，又何可以淹留？

時は續紛つんぶんとして其れ変易す、又何ぞ以て淹留えんりゅうす可けん。
蘭芷らんし變而不芳兮，荃蕙せんけい化而爲茅。

蘭芷は変じて芳しからず、荃蕙は化して茅ぼうと爲る。

何昔日之芳草兮，今直爲此蕭艾也？

何ぞ昔日の芳草、今直ちに此の蕭艾しょうがいと爲るや。

豈其有他故兮，莫好脩しゅう之害也！

豈あに其れ他の故ゆえ有らんや、脩しゅうを好むこと莫きの害なり。

余以蘭爲可恃兮，羌無實而容長。

余 蘭を以て恃たのむ可しと爲せり、羌ああ実無くして容長かたちちようず。

委厥美以從俗兮，苟得列乎衆芳。

厥その美を委すてて以て俗に従い、苟いくも衆芳しゅうほうに列するを得たり。

椒專佞以慢慝兮，櫛又欲充夫佩幃。

椒しやうは專もつぱら佞ねいにして以て慢慝まんたたり、櫛さつは又夫の佩幃はいきを充たさんと欲す。

既干進而務入兮，又何芳之能祗？

既に進むを干もとめて入れられんことを務つとむれば、又何の芳をか之これれ能く祗つとしまん。

固時俗之流從兮，又孰能無變化？

固もとより時俗の流れに従う、又孰たれか能く変化すること無からん。

覽椒蘭其若茲兮，又況揭車與江離？

椒蘭しやうらんを覽みるに其れ茲かくの若し、又況いんや揭車けつしやと江離かうりとをや。

惟茲佩之可貴兮，委厥美而歷茲。

惟ただ茲この佩はいの貴いぶ可き、厥その美を委すてて茲こに歷いたる。

芳菲菲而難虧兮，芬至今猶未沫。

芳菲ほうひ菲ひとして虧かけ難がたく、芬ふんは今に至るも猶お未だ沫やまず。

和調度以自娛兮，聊浮游而求女。

調度ちやうどを和らげて以て自ら娛あそしみ、聊いか浮游うゆうして女じよを求めん。

及余飾之方壯兮，周流觀乎上下。

余よが飾りの方に壯さかんなるに及んで、周流しゅうりゅうして上下しやうかを觀みん

注

- 續紛：乱れ動く形容。
- 蕭艾：ともによもぎの類。雜草であり、凡庸な人のたとえ。
- 慢慝：おこたりなまける。
- 佩幃：腰に佩びる香囊。
- 菲菲：香り高くにおう。

第十五段

◆ 靈均は靈氣の吉占と巫咸の勧めに従って、いよいよ自分のあこがれの乙女、知己をもとめて、遠征の途に上がる。天の河の渡し場から忽ち崑崙に至る。雄大な天路の歷程、龍車に雲旗をひるがえし、鸞輿を駆って自由に天空をかけるのである。そして西極の流沙、赤水をめぐって、天に昇る前のひと時、九歌や韶などの古代の天子の樂を奏し舞って、心をたのしませる。

◆ そしていよいよ天の輝く日光の中を昇っていこうとする、その時はるか下界の楚国に故郷が真下にちらりと見えた。そうなると、強い思郷の念に駆られ、足も立ちすくみ進むことが出来なくなった。この段は「離騷」篇のクライマックスというべきもの。

靈氣がよい占いを告げた上は、吉日を選んで私は旅に行こう。この世を脱れる清らかな旅故、玉樹を折って乾肉に代え、玉の屑をしらげて乾飯とする。

私のために飛龍に挽かせ、玉と象牙で車をつくらせる。どうして一旦そむき離れた心が一つになろうか。もはや私は遠くこの世をのがれ出よう。

転じて崑崙山に道をとれば、路は遙かに巡り巡る。雲や霓（虹）そのものを、旗としてなびかせて空を蔽い、白玉の鸞鳥の群がり鳴くのを、車の鈴として鳴らす。

朝天の河の渡し場から天空への旅にのぼり、夕暮れにはこの世の果て西方の極に至る。鳳凰は敬んで龍を画いた旗をささげ、高く天がけて翼をはばたく。

先ずあの風に流れる砂漠を行き、崑崙山より流れ出る赤水の岸をゆるゆる進み、蛟龍をまねいて橋をかけさせ、西皇に告げて赤水を渡させる。

路は遠くけわしいゆえ、従車に告げて小径をゆかせ、路を不周山にとって左に廻り、落ち合う先を西の果、西海とした。

群がる車は千台、玉輪を揃えて並び馳せ、うねうねうねる八龍にひかせ、ゆらゆらなびく雲の旗を立ててゆく。

はやる心を抑え歩みをゆるめても、私の精神ははるか遠くに馳せる。九歌を奏し韶舞を舞い、しばらく地上の日時を延ばして楽しもう。

陽光のかがやきわたる大空にのぼって、ふと見下せばわが住みなれし故郷。御者は悲しみわが馬さえも故郷を懐い、頭を垂れてかえりみて進もうとせぬ。

注)

● 鸞鳥…鳳凰の一種。 ● 西皇…西方の支配神。 ● 不周山…崑崙山の西北にある。

靈氛既告余以吉占兮，歷吉日乎吾將行。

靈氛既に余に告ぐるに吉占を以てす、吉日を歴んで吾將に行かんとす。
折瓊枝以爲羞兮，精瓊靡以爲糧。

瓊枝を折りて以て羞と為し、瓊靡を精げて以て糧と為す。

爲余駕飛龍兮，雜瑤象以爲車。

余が為に飛龍に駕し、瑤象を雜えて以て車と為す。

何離心之可同兮？吾將遠逝以自疏。

何ぞ離心の同じかる可き、吾將に遠逝して以て自ら疏けんとす。

遭吾道夫崑崙兮，路脩遠以周流。

遭りて吾夫の崑崙に道すれば、路脩遠にして以て周流す。

揚雲霓之晦藹兮，鳴玉鸞之啾啾。

雲霓の晦藹たるを揚げ、玉鸞の啾啾たるを鳴らす。

朝發軔於天津兮，夕余至乎西極。

朝に軔を天津に発し、夕べに余西極に至る。

鳳皇翼其承旂兮，高翱翔之翼翼。

鳳凰は翼しみて其れ旂を承げ、高く翱翔して之れ翼翼たり。

忽吾行此流沙兮，遵赤水而容與。

忽ち吾此の流沙に行き、赤水に遵いて容与す。

麾蛟龍使櫟津兮，詔西皇使涉予。

蛟龍を麾いて津に梁かけしめ、西皇に詔げて予を涉さしむ。

路脩遠以多艱兮，騰衆車使徑待。

路は脩遠にして以て艱み多く、衆車を騰せて徑に待たしむ。

路不周以左轉兮，指西海以爲期。

不周に路して以て左転し、西海を指して以て期と為す。

屯余車其千乘兮，齊玉軼而並馳。

余が車を屯むこと其れ千乘なり、玉軼を斉えて並び馳す。
駕八龍之婉婉兮，載雲旗之委蛇。

八龍の婉婉たるに駕して、雲旗の委蛇たるを載つ。

抑志而弭節兮，神高馳之邈邈。

志を抑えて節を弭め、神高く馳せて之れ邈邈たり。

奏《九歌》而舞《韶》兮，聊假日以媮樂。

九歌を奏して韶を舞い、聊か日を仮りて以て媮樂す。

陟陛皇之赫戲兮，忽臨睨夫舊鄉。

皇の赫戲たるに陟陛し、忽ち夫の旧郷を臨睨す。

僕夫悲余馬懷兮，蜷局顧而不行。

僕夫悲しみ余が馬懐い、蜷局として顧みて行かず。

注

- 羞：旅行用食料としての乾し肉。 ●瓊靡：玉の屑。 ●糗：乾し飯。
- 瑤象：美玉と象牙。 ●遭：転に同じ。 ●脩遠：長く遠い。 ●周流：あまねくつぎつぎにめぐる。 ●掩藹：たなびかせて空を蔽う。 ●軻：車。
- 天津：天の河の渡し場。 ●旂：旗。 ●高翔翺之翼翼：高く天がけて翼をはばたく。 ●玉軼：白玉の飾りのある輪。 ●婉婉：うねうねとしたさま。
- 委蛇：ゆらゆらと動くさま。 ●邈邈：遠くはるかなこと。 ●陟陛：のぼる。 ●赫戲：日の光のかがやき。 ●僕夫：霊均の御者。 ●蜷局：足の手ぎなやむさま。

第十六段

◆ 結語

◆ 故国の楚に絶望して、彭咸ほうかんを慕い、水死の決意をする。

乱おさめに曰く、「もうすべてはおわった

この国に人なく、ついに私を知る者はなかったのだ。もはやどうにもならない、この上何とて故都を懐おもおう。

もはや共によりき政をするに足る者に、ついに会えなかったのだ。私は慕したわしい聖人彭咸ほうかんの居る所を追ってゆこう」と

注)

● 乱：楚辞の賦の一つの形式で、一篇の最終の一節の名称。一篇を終結するためのものである。● 彭咸：殷の賢者であって、忠諫して容れられず、自沈して死んだ人。

亂曰：「已矣哉！」

乱らんに曰く、已やんぬるかな。

國無人莫我知兮，又何懷乎故都！

国に人無く吾を知る莫なし。又何ぞ故都を懐おもわん。

既莫足與爲美政兮，吾將從彭咸之所居！」

既に与ともに美政びせいを為すに足る莫なし。吾將まさに彭咸ほうかんの居る所に従わんとす、と。

まとめ

◆ 「離騷」一篇は、靈均という靈的な人物の独白的叙述の中に、女嬃じょしゆ（屈原の姉）・

靈氛・巫咸ふかんらの言辞を織りまぜて、極めて抽象的、且つ婉曲に、「愁いに罹かった心境」を繰り返して歌いつづける。そこには神仙的な幻想、伝説神話の国々をめぐる話が、華麗に繰り返りひろげられている。極めて浪漫的な詩篇であるにもかかわらず、それは楚国の現実的政治に対する憂憤の吐露であることは、篇中各所に露あらわれている。そして最終の乱辞には明瞭に表現されているのである。

◆ 屈原の政治上の立場、道義的精神、そしてその背景となっている楚国の運命などが、この悲痛で、しかも優婉な辞句に詠嘆されている。この篇こそは詩人屈原の生命の燃焼であり、精魂の結晶であって、千古不滅の作品といってよいであろう。

離騷の後世詩文への影響

後世詩文への影響は大きいと思われるが、ペーパーで調べる範囲ではその解説資料は見つからない。(尚、Chat GPT を用いれば、色々と分かることを後ほど知った。)

「漢詩を読む①」p53-54では、後世への影響と位置づけの点から、大きく二つの価値があると記している。

① 一つは優秀な人がさんざん悩んで苦勞するという、内容面での価値。近代に至るまで中国の知識人には一つの行動パターンがあつて、みずか自らの学問見識を懸命に磨いて天下社会に尽くそうとする、ところがとかく自分の思うとおりにゆかず、やむなく詩や文章を書いて志を述べる境遇に陥る。そういう軌跡をたどる人は多く、李白や杜甫も例外ではありません。そういう人たちは常に「離騷」に戻り、その内容に共感して作品を作った。つまり「離騷」は後世の大きな手本になっている。

② もう一つはより大きな視点になります、世界の文学や説話にこうした内容の類型があるという、普遍的価値。「貴種流離譚」と言つて、或る立派な主人公がさんざん苦勞させられ、それが彼の修行となつて、最後はめでたく自分のもといった場所に帰つてゆく――よく知られたところでは、「みにくいアヒルの子」がそうです。

李白は「古風」の中で「離騷」に触れている。以下、インターネットで公開されている、湯島聖堂での李白講義録（市川桃子先生）の一部を、市川先生のご快諾を頂いて転記する。

古風 五十九首 其の一 李白

① 大雅久不作

大雅久しく作らず

吾衰竟誰陳

吾れ衰うれば竟に誰か陳べん

王風委蔓草

王風は蔓草に委ち

戰國多荊榛

戦国 荊榛多し

龍虎相啖食

龍虎 相い啖食し

兵戈逮狂秦

兵戈 狂秦に逮ぶ

② 正聲何微茫

正聲 何ぞ微茫たる

哀怨起騷人

哀怨 騷人より起くる

楊馬激潏波

楊馬 潏波を激し

開流蕩無垠

流れを開き 蕩として垠り無し

廢興雖萬變

廢興 万変すると雖も

憲章亦已淪

憲章 亦た已に淪ぶ

③ 自從建安來

建安自從り來のかた

綺麗不足珍

綺麗なれど珍とするに足らず

④ 聖代復元古

聖代 元古に復し

垂衣貴清真

衣を垂れて清真を貴ぶ

羣才屬休明

群才 休明に屬し

乘運共躍鱗

運に乗じて共に鱗を躍らす

- 文質相炳煥
衆星羅秋旻
- 文質 相い炳煥
衆星 秋旻に羅なる
- ⑤ 我志在刪述
垂輝映千春
希聖如有立
絶筆於獲麟
- 我が志は刪述に在り
輝を垂れて千春に映ず
聖を希いて如し立つこと有らば
筆を獲麟に絶たん

【訳】

- ① 『詩経』の大雅のように正しい詩の潮流は長い間絶えてしまった。
もしここで私が力尽きたら、誰が正しい詩について述べるだろうか。
周の王朝が衰えてから、王風は雑草の中に廃れ
いばらが蔓延するような戦国時代となった。
龍と虎が食らいあうように諸侯が戦いを繰り返し
戦争の時代は凶暴な秦が天下を統一するまで続いた。

- ② この時代、正しい歌声はなんとかすかに、消えそうになったことか。
哀しみと怨みの声が、「離騷」を歌う楚の人から沸き上がった。
揚雄と司馬相如が衰えていく流れをふたたび激しくかきたてて、
新しく開かれた流れは滔滔と果てしなく流れていった。
このように詩文の流れは盛んになったり衰えたり様々に変化したが大雅の正しい法則、根本の理念はもうすでに滅びていた。

- ③ 建安年間の気骨のある詩人たちのあとの時代は、
綺麗だけれども珍重するに足らないつまらない詩が書かれた。

- ④ 唐代に入って、根源である古代に復帰し
天子が何もしなくても太平で、清らかで真実の詩が大切にされている。
多くの才能ある人々が天子のご命令（休明）のもとに活躍し
時代にもたらされた運勢に乗り、一緒に鱗を煌めかせて活躍している。
詩文の表現と内容が互いに照り映え
多くの星が澄んだ秋空にきらきらと輝いているようだ。

- ⑤ 私の志す所は、孔子が『詩経』を編纂した如く永遠の古典を作ることだ。
そうして千年ののちまで輝いていたいと思う
聖人の大業をなそうと願って、もし完成したならば、
孔子が「獲麟」で筆を止めたように、私も筆を擱こう。

【文学史 ダイジェスト】

紀元前一〇三〇年 周の国が建国された。

『詩経』には、周の建国のころからの歌がおさめられている。風、雅、頌の三つの部分からなる。『詩経』は孔子が取捨選択（刪述）して三百首を選び、編集したとされる。儒教の經典、四書五經の一つとなった。

周が紀元前七七〇年に東遷し、都を洛邑（洛陽）に移してから、周は弱体化し、多くの国の一

つとなり、国々が争いあう「春秋時代」となった。そして各国の命運をかけた戦国時代となる。

楚辞「離騷」は、戦国時代の楚の国の内紛で追放され放浪する屈原の哀怨を詠ずる。

漢代、壮大な賦という形式の文学が作られ、揚雄と司馬相如が代表的な作家だった。

漢末の建安年間には力強い五言詩が書かれた。六朝時代となって、詩の表現は洗練され奇麗な詩が作られたが、内容ある詩は作られなかった。

六朝時代の後、唐代に入ると、前代の洗練された表現に加えて、作者が実感した喜びや哀しみ、実際に見聞したことなど、充実した内容が歌われ、文（表現）と質（内容）を兼ね備えた、詩は世界でも第一級の芸術となった。

「正声 何ぞ微茫たる 哀怨 騷人より起こる

楊馬 頹波を激し 流れを開き 蕩として垠り無し

廢興 万変すると雖も 憲章 亦た已に淪ぶ」

この段落では、戦国時代から漢代までの、李白が高く評価している屈原、揚雄、司馬相如の三人の文人が挙げられています。この三人が、正声を継いだ者なのです。

「騷人」とは、「離騷」の作者屈原と、その流れを汲む人々です。「離騷」とは「騷（うれ）いに離（か）かる」という意味だそうです。戦国時代、「正声」が消えかかる中、南方にある楚の国は、北方の強大な秦に併呑される恐れの前で、政治が揺れていました。楚の王族であった誇り高い屈原は、讒言にあつて追放され、哀しみと怨みをいだいて放浪し、洞庭湖に身を投げたといえます。その憂国の公憤を述べた長大な叙事詩が「離騷」です。「離騷」には、戦国時代、多くの民族が故郷を追われ、勇敢な指導者に率いられ、新天地を求めて旅に出た、そのときの叙事詩が反映しているともいわれています。その長い詩の最後の部分を読んでみましょう。屈原は地上を見限つて、いよいよ天に向かいます。千輛もの供の車が皆白玉（はくぎよく）の輪をそろえて並んで馳せ、屈原は八頭の竜を車につけ、たなびく雲の旗を立てて天に昇ろうとします。そのときのこと。

陟降皇之赫戲兮、忽臨睨夫舊郷 僕夫悲余馬懷兮、蜷局顧而不行 （注…第十五段末尾）

（訳）天の陽光のかがやく中を登っていくとき、ふと我が故郷が目の下に見えた。すると私の従僕は国を去る身を悲しく思い、私の馬さえも故郷を恋いしたい、体をすくめて、振り返りみて進まないのであった。

「離騷」はここで終わります。故国を追われた屈原の怨みと、それでも故国を愛さずにはいられない哀しみが胸を打つ作品です。

漢代に入って、揚馬と併称されている揚雄と司馬相如は、壮大な賦を書いています。対句を多用し、語彙は豊富で、華麗な作品群です。彼らは新しい流れを開き、その流れはとうとうと後代まで流れていきました。これらは「正声」と言うべきなのでしょう。しかし、と李白は言います。このような壮大な作品も、「憲章」とはいえない、と。「憲章」とは、根本の法則、根源となる理念、という意味でしょうか。「憲章 亦た已に淪ぶ」大雅の根本の理念は失われてしまいました。

「建安自從り来のかた、綺麗なれど珍とするに足らず」

建安年間（一九六年―二二〇年）は、漢代の最後の年号ですが、すでに魏の曹操が実権を持っていました。魏の曹操と、その息子の曹丕・曹植のもとに、多くの文人が集まってきて、その中の特に名のある七人が「建安の七子」と呼ばれています。曹操親子は武人でもあり、かれらの作品は、時には明るく闊達、時には戦乱に苦しむ民衆とともに悲しむ、精神が充実したものです。

三国時代の後は六朝時代、貴族文化が花開いた時代です。表現の美しい作品がたくさん書かれました。中には、李白が大好きな斉の謝朓しゃちょうも含まれています。しかし、それらは表現が美しく魅力的なだけで、著者の精神がともなっていないませんでした。だから、「正声」とはいえない、珍重するに足りない、と切り捨てられています。

詩の歴史の最後に、唐代の詩人たちについて語られます。同時代のことですから、たいそうほめています。じっさい、唐代には、前の時代、六朝時代に培つちかわれた表現技巧（文）に加えて、作者に実際の見聞や、実感した思い（質）が書き込まれ、表現と内容ともに充実したものになっていきます。

さて、ここまで歴史を振り返ってきて、結びの四句です。ここに李白の言いたいことが述べられています。

「我が志は刪述に在り。輝ひかりを垂れて千春に映ず。
聖を希いて如し立つこと有らば、筆を獲麟に絶たん。」

ここで李白は再び『詩経』に戻ります。「刪述」とは、「文章の良くないところを刪けずり、良いところを述べ伝える」という意味です。孔子は当時見られた詩の中から悪いものは刪り、良い詩を取って『詩経』三百首を編集したとされており、『詩経』の序に「聖人刪述の意」とあります。李白も『詩経』のような詩集を作ることができれば、その詩集は千年ののちまで輝くことでしょう。

春秋時代の魯の哀公が十四年春、西方に狩りをして麒麟をとらえ、孔子は乱世の当時に麒麟があらわれたことに感じて、歴史書の『春秋』の編集に着手したといわれています。『春秋』とは、孔子が編集したとされる歴史書（前七二二年から前四八一年の、魯の国を中心とした歴史）で、『詩経』とともに、儒教の五経の一つとなっています。そして、孔子の書いたという『春秋』は、「十有四年春、西に狩して麟を獲らう」という所で終わっています。

李白が結論として言いたかったことは、「孔子のように、『詩経』や『春秋』のような立派な業績を残したい」ということでした。

楚辞 日本への影響

(Google AI による概要)

概要

楚辞は、中国の戦国時代の詩人屈原らが創作した詩文集で、日本の文学に大きな影響を与えました。特に、長編詩である「離騷」は、失意と悲しみを歌ったその内容が、日本の歌人や文人に影響を与え、情緒豊かな表現様式や、神話や比喻を駆使した表現は、日本の文学作品にも受け継がれていきました。

楚辞の日本の文学への影響

「離騷」の影響

屈原の「離騷」は、日本の歌人や文人に深く影響を与え、失恋や政治的失意など、人間感情を表現する際のモデルとなりました。

「離騷」の夢幻的な表現や、神話や比喻を駆使した描写は、日本の文学作品にも受け継がれ、抒情的で情緒豊かな文学作品の誕生に貢献しました。

神話や比喻の利用

「楚辞」は、中国の神話や伝説、歌舞などを多く取り入れており、これが日本の文学作品にも影響を与えました。神話や比喻を駆使した表現は、日本の文学作品にも受け継がれ、より豊かな表現を可能にしました。

日本における『楚辞』の影響

(Chat GPT)

奈良・平安時代

『楚辞』の受容と文学への影響

『楚辞』は奈良時代(8世紀)にはすでに日本に伝わっており、天平二年(730年)の『大日本古文書』に「離騷三帙、帙別十六卷」との記載があります。これは『楚辞』が日本に伝来し、貴族階級の間で読まれていたことを示しています。

また、日本最古の漢詩集『懷風藻』(七五一年)や歴史書『日本書紀』(七二〇年)にも『楚辞』の影響が見られます。例えば、『日本書紀』の神代記には、屈原の『漁父』に似た「行吟海畔」の描写があり、これは屈原の「行吟沢畔」のイメージを反映していると考え

鎌倉・室町時代

禅僧による屈原像の再解釈

鎌倉から室町時代にかけて、禅宗の僧侶たちは中国文化に深い関心を持ち、屈原の精神や『楚辞』の詩風を積極的に取り入れました。例えば、一休宗純(一三九四―一四八一)は『屈原像』という詩を詠み、屈原の忠誠心や高潔な人格を称賛しています。

(参照) 屈原像 (屈原の像)

一休宗純

楚人離騷述愁腸 楚人は離騷に愁腸を述ぶ
深吟湘南秋水長 深吟する湘南 秋水長し
逆耳忠言千載潔 逆耳の忠言 千載に潔し
春蘭風露幾清香 春蘭の風露 幾ばくか清香
注) ●愁腸：わびしい思い。愁思、愁裏ともいう。

江戸時代

江戸時代の学者、亀井昭陽は『楚辞』の研究に取り組み、特に屈原の精神性に共感を示しました。彼の研究は、当時の知識人たちが『楚辞』を通じて自己の思想や感情を表現する手段としていたことを示しています。

学術的な研究と翻刻の進展

江戸時代には、朱子学が幕府の官学として採用されたこともあり、『楚辞』の研究が盛んになりました。藤原惺窩は朱熹の『楚辞集注』を基に『注解楚辞全集』を編纂し、一六五一年に刊行しました。これは日本最初の『楚辞』訓点本とされています。また、石川三佐男教授の調査によれば、江戸時代には『楚辞』に関連する和刻本や重刊本が七〇種類以上存在しており、日本における『楚辞』研究の広がりを示しています。

明治以降

近代以降、日本の知識人たちは『楚辞』、特に屈原の詩文に表れる「屈騷精神」に共鳴しました。この精神は、愛国心や理想主義、個人の信念を貫く姿勢として、多くの文学者や思想家に影響を与えました。

西村時彦による体系的研究

明治時代以降、西村時彦（一八六五―一九二四）は『楚辞』研究において重要な役割を果たしました。彼は『屈原賦説』や『楚辞纂説』などの著作を通じて、『楚辞』の注釈や解釈を体系的に行い、日本における『楚辞』研究を学問的な水準に引き上げました。

『楚辞』の中で、日本文学に特に影響を与えた詩篇として代表的なものをいくつかご紹介します。

1 《離騷》（りそう） ― 屈原作

内容… 愛国の志を持ちながらも君主に疎まれ、放逐された詩人が、自らの潔さと理想を守るため、天界や幻想世界をさまよう長編叙事詩。

日本への影響… 日本の和歌における「隠者文学」や「うらみ・嘆きの美学」に影響を与えたとされます。

『万葉集』の山上憶良や大伴旅人らが描いた「世の中への失望と理想の探求」は、屈原の影響があるとされています。

2 《九歌》（きゅうか）――屈原に帰される作品群

内容… 自然神や霊を讃える祭祀的な歌で、楚の宗教文化を背景にしています。
日本への影響… 神道と結びつきやすく、祝詞（のりと）や神楽歌の形式に影響を与えた可能性があるとされています。たとえば、自然崇拜・精霊信仰の表現形式として、古代日本の神話文学と共鳴する点があります。

3 《漁父》（ぎよほ）――屈原と漁師の問答形式の短編

内容… 追放された屈原が、川辺で漁師と出会い、「なぜ世に迎合せぬのか」と問われるが、自らの信念を貫く姿勢を示す。

日本への影響… 『徒然草』や『方丈記』に見られるような、世俗を離れて生きる思想＝隠遁思想の原型とされます。日本の文人が理想とした「隠者像」に影響を与えました。

4 《九章》（きゅうしょう）――特に「思美人」や「抽思」など

内容… 主君への忠誠、民への憂い、そして不遇な自分の境遇を嘆く詩。

日本への影響… 忠義や無念を歌う文学モチーフとして、『平家物語』などの中世軍記に共通する感情が含まれます。感情表現が豊かで、後の漢詩文や和漢混交文にも影響しました。